

ペン俳句会 句会報(三四六号)

令和五年七月六日(木)

兼題『ラムネ』、席題『菓』

句会を七夕の前日に開催。出席者は十三名(投句十四名)。

宮原 凧

頭痛薬一錠残し梅雨明けり
雨の日の匂ひを重ね栗の花
庭石のガバリと動き蟻蛙
ラムネ瓶ラッパ飲みして迫る空
夕涼み素肌に届く母の下駄

大津 そうかい

もう言葉要らぬ二人の心太
梅雨の夜の家路憤りを宥めつつ
雲の峰ゴールキーパー仁王めき
夕顔やいつも控え目薬指
気塞ぎを晴らすラムネの曖気(あいき)かな

首藤 しずを

凌霄花の濃き夕映えを独り占め
梅雨空に課長の小言長からむ
ラムネ水噴きこぼしつつ差し出さる
子めだかの己が影追ふ昼下がり
大皿に薬味を散らし夏料理

中村 晃也

グラマーなチエロを背(せびら)に飲むラムネ
俎板の傷に残れるパセリの香
十薬や主なき庭占抛せり
不意の客夏座布団を裏返す
ビー玉が欲しくてラムネ買ひたい子

内藤 まりこ

くちなしの肉厚の白濃き香ほり
夏初めのビールは薬通り雨
ママチャリを止めてラムネをラッパ飲み
夏の夜の鼻肩の選手ホームラン
ダンゴ虫玉になりたり汗の手に

志村 良知

秘薬なるジントニツク濃し暑気払ひ
薬味には青唐辛子とリクエスト
古民家やラムネあります四角旗
初物の枝豆若し歯に弾み
あぢさゐやあいさつ続く児等二列

長尾 進一郎

梅雨明やキャッチボールの弧を描く
植へし田の苗の並びに乱れ無し
目薬を差して残葉夏の星
草取や小さき葉っぱはお目こぼし
井戸水にラムネを冷やし祖母の待つ

松田 一文字

十薬や空き家の庭の植木鉢
昼近き井戸に吊るせしラムネかな
薫風や家並み見晴らす二月堂
飲むたびに音の響けるラムネ玉
五重丸天気図にあり梅雨出水

森田 元斐

神体の緑深まり大社
幾位もの新精霊や里の夏
家付きの女将蔵出す冷やし酒
少年の一步及ばずラムネ噴く
樟若葉手垢まみれの薬師像

浜口 須美子

ラムネ玉シユポンと胸のつかえ落つ
乳鉢の薬粒つぶし花火聞く
子が四つ葉見つけるまではと夕日浴ぶ
明日からの糧に紅薔薇髪を切る
でで虫の辿りし道は輝けり

新田 ゆふき

電線の下に青山夏の窓
水無月と声にしてみる雨籠り
魂のふといなくなる梅雨晴間
夏の日や岩の宮殿薬師岳
宅配の三輪自転車ラムネ水

高橋 由紀子

老犬のふと止むいびき夏の夜半

山の茶屋ラムネの旗のパタパタと

虫刺され何でも母の薬箱

夕闇へノウゼンカズラー花落つ

梅雨明けや青空に富士黒々と

安藤 晃二

十葉抜く縁で和める垣根越し

母の背やラムネしつかり医者帰り

水無月のティーシャツ駆け出す豪雨かな

縁台の午のラムネの玉の音

処方箋薬局多し夏つばめ

西川 知世

法事寺廊下に大き扇風機

大笹にトマト山盛り坊厨

ラムネ瓶に故郷の音詰りあし

三伏の名前似通ふ処方箋

石仏の猫背で御座す夏出水

次回は令和五年八月三日（木）、

兼題は夏の季語「朝顔」（宮原風さん出題）、席題は西川知世さん出題の「林」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

朝顔 牽牛花・西洋朝顔

西川 知世

朝顔が秋の花というのは、なかなかすつと入ってきません。こどものころの夏休みの花のイメージがあるからでしょうか。立秋は陽暦で八月八か九日ですから体感とは離れています。堂々と秋の花です。山上憶良の歌「萩の花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤袴朝顔の花」と万葉集にうたわれているそう。長谷川權の文章に、秋とはいってもまだ暑い日中を避けて、朝早くそつと花を開く。このひそやかこそが朝顔の本意だと書かれています。早起きして作る旬なのでしょうか。江戸期にたくさんの句があります。

朝兒や露もこぼさず咲きながら

樽良

朝顔に我は飯くふ男かな

芭蕉

朝顔も実勝ちになりぬ破れ垣

太祇

朝がほや一輪深き淵のいろ

蕪村

現代では

北斗ありし空や朝顔水色に

渡辺水巴

朝顔や濁り初めたる市の空

杉田久女

朝顔やおもひを遂げしごとしほむ

日野草城

珈琲濃しあさがほの紺けふ多く

橋本多佳子

朝顔や百度訪はば母死なむ

永田耕衣

朝顔やひとはひとつの顔に老い

加藤秋邨

次女に生まれて朝顔の紺が好き

渡辺恭子

箱に咲く朝顔銀座裏通

松尾隆信